

## 雲を吹く風

——「汾上驚秋」の解釋をめぐる和漢比較文學論攷——

大 谷 雅 夫

京都大學

配にはつと驚いたことを言う。

起承句はひとまず措く。轉結句は、「たださえ、さまざまの物思いに亂れている心の絲が、時あたかも草木搖落の季節にめぐりあつては、風の音や、その風に散り舞う落葉がたてる秋の物音など、悲しくてとても聞けたものではない」(高木正一「唐詩選」中國古典選)という心情を語る句であり、理解はさまで難しくないであろう。

しかし承句は、單純な事からを語る表現のように見えて實は解釋が難しい。「萬里渡河汾」の「渡」に重大な問題があつた。「河汾を渡る」、その主語を作者自身と考えるかあるいは初句の「北風」とするか。二通りの解釋があつて歸一するところを知らないのである。

あなたはいま、それをどう讀んだらうか。

## 二

初唐・蘇頌(六七〇―七二七)の次の五言絶句は、『唐詩選』などにも選入されて廣く知られた作であろう。

汾上驚秋 蘇頌  
北風吹白雲 北風白雲を吹き  
萬里渡河汾 萬里河汾を渡る  
心緒逢搖落 心緒搖落に逢ひ  
秋聲不可聞 秋聲聞く可からず

詩題の「汾」は中國山西省を北から南に縦斷して黄河に流れ入る汾水。「汾上驚秋」とは、汾水のほとりで秋の氣

雲を吹く風(大谷)

この詩が汾水の秋、白雲を吹く風を詠むことは、次の名歌、漢武帝「秋風辭」(『文選』卷四十五)を思い起こさせるだろう。

秋風辭 漢武帝

秋風起兮白雲飛 秋風起りて白雲飛び

草木黃落兮雁南歸 草木黄ばみ落ちて雁南に歸る

蘭有秀兮菊有芳 蘭に秀有りて菊に芳有り

攜佳人兮不能忘 佳人なつこを攜たづへて忘ること能はず

泛樓舫兮濟汾河 樓舫うかを泛うかべて汾河を濟わたり

橫中流兮揚素波 中流よこたに横よこたへて素波あを揚あぐ

簫鼓鳴兮發棹歌 簫鼓鳴りて棹歌おこ發り

歡樂極兮哀情多 歡樂極まりて哀情多し

少壯幾時兮奈老何 少壯幾時いづくぞ老いかんを奈い何せん

この「秋風辭」を「汾上驚秋」の典故として指摘するのが

『唐詩訓解』七卷であった。明の萬曆四十六年（一六一

八）四月刊、李攀龍選・袁宏道校と稱するこの書は、江戸

時代の寛文（一六六一—一六七三）ごろまでには和刻出版さ

れており（『日本古典文學大辭典』『唐詩選』）、収録される詩

はほぼ『唐詩選』に重なる。「汾上驚秋」もその卷六に見

られる。

その起承句の語注に言う（訓點略）、

『詩』北風其涼○「武帝辭」秋風起兮白雲飛又泛樓船

兮濟汾河「注」汾水出太原入河

『唐詩訓解』は、この語注の後に、詩の大意を一字上げ

の別行に示すが、それを今度は和刻本の訓點を参考に訓讀

してみよう。

風、白雲を吹くは初秋つゆの候ま。蓋けだし汾上ふのに因りて漢武の

語を用ゆるなり。遂に言ふ、我が心緒適まさに搖落まに逢ふ、

安いづくんぞ復たこの秋聲を聞く可けんや、と。時、蓋し

意を失ひてここに居るのみ。

汾水のほとりから漢武帝「秋風辭」を連想して、起句に

「風」「白雲」という言葉を用いたことを指摘するのであ

る。明・唐汝詢『唐詩解』の「評解」にもこれと同文の注

釋が見られるが、共に承句「萬里渡河汾」の「渡」の主語

についての言及はない。明の鍾惺の『評釋』、明末の蔣一

葵の『箋釋』、清初の吳吳山の『附注』などの『唐詩選』

注釋書にも「渡」の主語に關わる注釋は備わらない。

中國の『唐詩選』注釋において「渡」の主語をはじめて

示したのは、明・徐震『唐詩選彙解』の雕題（上欄の注）

の次の一文であろう。

言、當初秋之候而遠渡河汾、奈心緒適逢搖落、豈堪復聞此秋聲乎、

「初秋の候に當りて、遠く河汾を渡る」とは、言うまでもなく、「渡」の主語を作者蘇頌と解釋したのである。

また、明末清初の王相『新鐫五言千家詩箋註』も同様の理解を示す。王相のその著は、謝枋得編とされる七言詩のみを選録する『千家詩』に五言詩を増補し、注釋を施したもののだが、その五言詩の中に「汾上驚秋」が含まれている。その注に次のように言う。

許公奉使渡汾河而驚秋之作也。汾上去東都未甚遠、而言萬里者、將有萬里之行也。客方有萬里之行、何堪北風蚤至、雲物淒涼、木葉飄搖、秋風悲壯、前途遙遠、愈入寒涼之地、長途之苦、可勝惜哉！

許國公、すなわち蘇頌が、使者となった旅で汾河を渡って秋の到来に驚いた作だと説く。「汾上は東都を去ること未だ甚だしくは遠からず」云々と述べることについては後述する（八頁）が、それはともあれ、それに續く「客、方に

雲を吹く風（大谷）

萬里の行有り」の注には、「萬里渡河汾」の「渡」の主語を作者蘇頌とする解釋が示されているのである。

王相『千家詩箋註』の江戸時代における受容については知るところがないが、先の徐震『唐詩選彙解』は「文化甲子〔一八〇四〕の印のある木村兼葭堂舊藏書が内閣文庫に所藏されている。しかし、「渡」の主語を蘇頌自身とするその解釋は、日本では、享保二十年（一七三五）の序文をもつ入江南溟『唐詩句解』に、すでに次のように見られるものであった。括弧の中は細字による割注。訓點は省略し、句點を補う。

北風吹白雲（漢武秋風辭、秋風起兮白雲飛）萬里（去已萬里）渡河汾（又浮樓船兮渡汾河、二句用漢武之語○言、客遊至汾上、初逢北風吹白雲之候、已去鄉萬里而獨渡河汾、蓋寫旅途寂寞）

起句の注に漢武帝の「秋風辭」の「秋風起兮白雲飛」を引くのは『唐詩訓解』の踏襲であろう。そして、それに續いて、「秋風辭」の第五句の「泛樓船兮濟汾河」を引くことも『訓解』と同じである。しかし、『訓解』に異なつて、

ここで重要な意味をもつのは、その「秋風辭」第五句をこ  
とさら承句の「渡河汾」の三文字の注として引くことであ  
る。しかも、その「漢武之語」はここでは「浮樓船兮渡汾  
河」と記す。三箇所において文字の異なる引用なのだ  
が、なかでも「濟汾河」を「渡汾河」とするのは、それが  
たとえ不注意の結果であつたとしても、承句の「渡河汾」  
を「秋風辭」の「濟汾河」を承けるものと讀解したことを  
圖らずも明示するであらう。

「秋風辭」は汾水の上に船を浮かべた管弦の遊びを詠う  
のだが、「汾上驚秋」には旅の途上に汾河のほとりに來て  
秋に氣づいたことが詠われる。作詩の事情は異なる。しか  
し、「汾上驚秋」が「秋風辭」の影響下に成つた詩である  
以上、その「河汾を渡る」の「渡」も、「秋風辭」の「汾  
河を濟る」の「濟」と同じく、舟による渡河を意味するも  
のと見た。そして、「萬里河汾を渡る」を「已に郷を去る  
こと萬里にして獨り河汾を渡る」ことと、すなわち「渡」  
の主語を旅人である作者自身と、南溟は解釋したのである。

南溟『唐詩句解』は、「渡」の主語を旅人とする點で徐

震『唐詩選彙解』、および王相『新鐫五言千家詩箋註』に  
一致する。しかし、その注釋の方法、用語においては、

『彙解』『箋註』とは異なる。『彙解』『箋註』は「秋風  
辭」を引かないが、『句解』はそれを典據とする。「秋風  
辭」を引くことにおいて『句解』は「訓解」を踏襲するの  
であり、しかも、それを承句の「渡河汾」にまで擴大した  
のである。『句解』の注は、おそらく『彙解』『箋註』に學  
んだものではなく、『訓解』を展開して新たに成つたもの  
と考えるべきであらう。

入江南溟は荻生徂徠の門人であつた。そして、後にも引  
くように、やはり徂徠門で『唐詩選』を校刊した服部南郭  
も同様の解釋であつた(十三頁)。徂徠の古文辭の提唱とと  
もに江戸の讀書界を席巻した『唐詩選』が刊行された當初  
より、「萬里河汾を渡る」の句は、萬里を行く旅人が渡河  
することと理解されていたのである。その他にも、

新井白蛾『唐詩兒訓』(寶曆八年「二七五八」刊)

タダサヘモ秋ハ悲シキ物ナルニ、況ヤ故郷ヨリ萬里  
モ遠キ旅ヲ經テ、今此河汾ヲ渡ルコト、物ウキ旅ノ身

ノ上ト、秋色ノ來ルト感ジテ憐ヲ催セシ也、

千葉芸閣『唐詩選講釋』（寛政二年「一七九〇」刊）

ヲリシモコノ處ニキテミタレバスズシキ風ガ秋ニナル  
ト起リ白雲ヲ吹クヲリカラ萬里ヲキテ河汾ヲ渡ル心細

サ……

皆川淇園『唐詩通解』（寛政六年「一七九四」刊）

北風吹白雲之時、行程萬里而今方渡河汾、

なども同じ解釋である。さらに、引用は省くが、戸崎允明

『箋註唐詩選』（天明四年「一七八四」刊）、宇野東山『唐詩

選辯蒙』（寛政二年刊）、小林高英『唐詩選和訓』（寛政二年

刊）など、また近代の久保天隨『唐詩選新釋』、釋清潭

『唐詩選』（國譯漢文大成）、簡野道明『唐詩選詳説』、齋藤

响『唐詩選』（漢詩大系）、前野直彬『唐詩選』（岩波文庫）、

目加田誠『唐詩選』（新釋漢文大系）、前野直彬『唐詩鑑賞

辭典』等々も同じである。『唐詩選畫本』<sup>えほん</sup> 五言絶句（天明

八年初刻・文化二年再刻、橘石峯書畫）のこの詩の畫には、二

人の人物が乗る篷船が描かれ、「汾河といふ川を舟にてわ

たるとき秋風にしら雲のとぶを見て……」という解説が施さ

雲を吹く風（大谷）

れる。作者蘇頌が船によって汾河を渡る姿が思い描かれていたのである。

それが、江戸時代から今日までのこの詩の一般的な讀解であった。

しかし一方、汾河を渡る主語を「北風」と見て、「萬里」は北風が白雲を吹き運んできた距離だとする注釋も、

江戸時代以來、少數ながら存在した。

釋覺瑞（雪巖）『唐詩譯説』（寶曆十年「一七六〇」刊）

【萬里】秋風遙吹來<sup>ル</sup>云

森槐南『唐詩選評釋』下卷之三（一八九六年）

萬里の北風、白雲を吹て以て河汾を渡る

高木正一『唐詩選』（一九六五年）

つめたい北風が白雲を吹きとばしつつ、萬里の遠くか

ら、汾水を吹きわたっていく。

平野彦次郎『唐詩選研究』（一九七四年）

北風が遠く萬里より來て、河汾（汾水）を吹き渡るこ

と。

いずれも、白雲を吹き運ぶ北風が、はるか萬里のかなたか

ら今しも汾河を吹き渡つてゆくことと解釋するのである。

このように、「萬里渡河汾」の「渡」の主語を作者自身とする解釋と、「北風」とする解釋と、二通りの考え方があった。日本の漢學界においては、前者が通説であり、後者はそれにやや後れて現れた少數説の位置にある。近年の注釋書のなかでは、中國の古典『唐詩選』下(中島敏夫・佐藤保、一九八六年)は「萬里の旅をつづけて、今、汾水を渡る」と現代語譯する一方で、その脚注においては「白雲を吹く北風が萬里の彼方より吹き來たつて河汾を渡るとも取れる」と記す。『校注唐詩解釋辭典』(松浦友久編、一九八七年)も、後に示す(七頁)ように、同様の書きぶりである。

では、現代中國の注釋書はどうだろうか。

管見に入った注解のうち、ほぼ同時期に刊行された注釋をあげてみよう。實は、こちらも二つに分かれている。まず「渡」の主語を「我」とする注釋書としては、先の王相『新鐫五言千家詩箋註』の注をほぼそのまま取り入れた王正湘『千家詩』(一九八〇年、湖南人民出版社)がある他、

秀龍・陸渾『唐宋絕句選注析』(一九八〇年、山西人民出版社)

萬里喻遠離家鄉。這兩句說、蕭蕭北風吹散了天上的白雲、長途跋涉來到這充滿寒意的汾河岸邊。

張哲永『千家詩評注』(一九八二年、華東師範大學出版社)

萬里渡河汾「秋風賦」又云「泛樓船兮濟河汾」。這句說、路遠迢迢來到這淒涼蕭索的汾河邊上、  
が見られる。

一方、「渡」の主語を「北風」とする説も、

劉永濟『唐人絕句精華』(一九八一年、人民文學出版社)

首二句正寫秋聲。

『唐詩鑑賞辭典』(一九八三年、上海辭書出版社)

他在汾水上被北風一吹、一陣寒意使他驚覺到秋天來臨、而他當時正處于一生最感失意的境地、出京放任外省、恰如一陣北風把他這朵白雲吹得老遠、來到了這汾水上。這也合乎題目標示的「汾上驚秋」。

『中國歷代詩歌名篇鑑賞辭典』(一九八九年、農村讀物出版社)

悽厲の朔風、把飄浮不定的「白雲」吹過了「河汾」、吹向了萬里的遠方、がある。

短文による注解だけを確認しておこう。『唐宋絕句選注析』の「萬里喻遠離家鄉」は、「萬里」を作者自身が故郷を遠く離れてきた距離の表現とする。それなら、「萬里渡河汾」は作者が渡河することである。一方、『唐人絕句精華』の「首二句正寫秋聲」は、「北風吹白雲、萬里渡河汾」の二句を秋の物音の描寫とする。汾河を渡る北風の音がそこに寫されているとするなら、「渡」の主語は「北風」となるであろう。

以上のような二つの説の對立を示した『校注唐詩解釋辭典』の「諸説の異同」は、前者をA説、後者をB説とした上で、「渡」の主語を「我」とするA説の根拠を、「①『渡』の語の一般的な用例、②『渡河汾』の語は特に『秋風辭』の『濟汾河』の句を意識する、③この詩は旅中の作と考えられる、などの點を考慮して生まれたのであろう」と推測する。

雲を吹く風（大谷）

①は、動詞「渡」は一般的に人を主語とするという指摘であろうか。しかし、李白の「秋風渡江來、吹落山上月（秋風江を渡り來たり、吹き落す山上の月）」（送崔氏昆季之金陵）のように、「秋風」が「渡」の主語となることもある。後にあげる蘇頌の別の詩句の場合も同様である（十一頁）。②は、入江南溟『唐詩句解』の説を紹介する際に述べた（四頁）ように、「汾上驚秋」が漢武帝「秋風辭」の影響下にあることから、「渡河汾」も「濟汾河」と同様の意とする考え方である。しかし、假に「秋風辭」がこの詩の典拠であるとしても、典拠に詩全體を拘束する力はない。實際、「秋風辭」と「汾上驚秋」の表現、内容の相違點は少なくない。「秋風辭」の影響は、初句に白雲を吹く風を詠む點に留まり、承句には及ばないとも考えうる。さらに③の「旅中の作と考えられる」ことは、常識的に考えて、承句の解釋を定める根拠とはならないであろう。

『校注唐詩解釋辭典』は、B説については、「萬里の北風が白雲を吹きとばしつつ、汾水を吹きわたっていく」秋のもの淋しい敘景描寫のなかに、深い旅愁をにじませた表

現であるとも充分捉えられ、スケールの大きさという點で注目すべき一説である」と述べる。通釋においては「私は（ひとり）はるばる萬里も旅して」と譯していながら、結局、A説B説の是非を定めていないのである。

三

通解のように「萬里」を遠い旅の道のりの表現とすれば次の問題が生じる。「汾上」が汾水流域のどのあたりであろうとも、作者蘇頌の故郷の陝西省武功縣、あるいは都長安、東都洛陽、そのいずれからも「萬里」と謂うほどの距離ではないことである。詩の表現に誇張はつきものとは言え、「汾上」までを「萬里」と稱するのはあまりに大げさすぎる。「萬里」は唐詩の常用語ではあっても、主として邊塞詩や、吳楚、遼東、安南などへの行旅の詩に見られるのである。

「渡」の主語を作者自身とする注釋書の多くはその問題に觸れないが、それに敢えて説明を加えようとしたのが先の王相『新鐫五言千家詩箋註』であった。前節の引用（三

頁）を改めて訓讀して示せば、「汾上は東都を去ること未だ甚だしくは遠からず、而るに萬里と言へるは、將に萬里の行有らんとすればなり」。第二句の「萬里」を、「萬里は遠く家郷を離るるを喩ゆ」（六頁所引『唐宋絕句選注析』のよう）に郷里から汾河までの距離とするのではなく、「汾上」から「萬里」あなたへと旅立つ、その旅程の遠さを言うものと考えたのである。そのような「萬里」の類例としては、たとえば「萬里辭家事鼓聲（萬里家を辭して鼓聲を事とす）」（劉長卿「送李判官之潤州行營」『唐詩選』卷七）が挙げられよう。友が「萬里」あなたの邊塞への旅に向かうことを言う句である。しかし、「萬里家を辭して」とは、友の家が出發點の旅だからこそ言える表現ではないか。旅の途上にあるはずの汾上において、「將に萬里の行有らん」と意識する理由は考えにくい。また、そもそも唐の版圖のうち、都から「汾上」を経て、そこから更に「萬里」の地とはどこを考えたらいのか。『全唐詩』に遺された蘇頌詩にはその最初に「祭汾陰樂章壽和」がある他は、奉和詩、餞送詩が多く、彼自らが北邊に赴いたことを示す作はない。



新舊の『唐書』にもその記録は見られないのである。

あるいは『唐詩鑑賞辭典』におよそ次のように言うのもこの問題に關わる可能性がある。——作者蘇頌は政治家として成功した人であり、玄宗皇帝の信任篤く、都で朝政に與る期間が長かった。地方に出たのはその晩年の二年間、益州大都督府長史に赴任したことが知られるのみ。この詩は、蘇頌がもつとも失意を味わつたに違いないその二年間の作ではないか。——倪其心のこの讀解は、都を出て西南の蜀國へ、さらに北東の汾上へと失意のままに流浪する蘇頌が、はるかに萬里を吹かれてきた白雲に自身の姿を投影したと見るものである。「渡」の主語を「白雲」とする解釋として前に（六頁）引用したものである。しかし、その説のように、蘇頌が都から蜀、蜀から汾上へと旅した時の作とするなら、それを「萬里」の旅と稱することもさほど不自然にはならない。「渡河汾」の主語を作者蘇頌と讀み解くことも、その場合には可能となるかも知れない。けれども倪其心説の「最大の難點は、蜀での在任中に、今の山西省の汾河のほとりになぜ赴くことができたのか、という

點が全く不明なことである」（『校注唐詩解釋辭典』）。晩年の二年間の作と限定せざるを得ないことを含めて、難しい想定と言ふべきであろう。

#### 四

それに對して、「萬里」を「北風」に關わる語と見ることは容易である。風が「萬里」を吹くとする表現はごくありふれたものであつた。

杜甫「暮春」

楚天不斷四時雨 楚天斷えず四時の雨

巫峽長吹萬里風 巫峽長く吹く萬里の風

高適「自淇涉黃河途中作十三首（第六）」

北風吹萬里 北風萬里を吹き

南雁不知數 南雁數を知らず

しかも、萬里を吹く風が何かを吹き運んで川や關を「渡」る、または「度」るとすることも表現の一つの型としてあつた。

劉商「胡笳（第十四）」

南風萬里吹我心 南風萬里我が心を吹き

心亦隨風渡遼水 心も亦た風に隨ひて遼水を渡る

南からの風が萬里はるばると我が心を吹き運んで、遼水を渡つてゆく（はるか東北の、胡地にある我が子を思いやる）ことを詠う。

また、李白の樂府詩「關山月」の冒頭四句にも云う、

明月出天山 明月天山を出で

蒼茫雲海間 蒼茫たり雲海の問

長風幾萬里 長風幾萬里

吹度玉門關 吹き度る玉門關

天山から昇つた月が、都から幾萬里も吹き來たつた風に運ばれて、今まさに玉門關を渡つてゆくことを詠うものである（拙論「吹」と『ふく』―和習の背景』『歌と詩のあいだ』）。

劉商と李白の詩は、ともに萬里を吹く風が、心や月をはるか遠方まで吹き運ぶことを言う。

風がものを遠くに吹き運ぶという表現は、南北朝詩や唐詩に普通に見られるものであった。『文選』卷三十一の南

朝宋・鮑照の次の五言古詩がそれであった。

學劉公幹體 鮑明遠

胡風吹朔雪 胡風朔雪を吹き

千里度龍山 千里龍山を度る

集君瑤臺裏 君が瑤臺の裏に集まり

飛舞兩楹前 兩楹の前に飛舞す

茲辰自爲美 茲この辰しよに自ら美を爲すも

當避艷陽年 當に艷陽の年を避くべし

艷陽桃李節 艷陽の桃李の節

皓潔不成妍 皓潔なるも妍うるはしきを成さず

第三・四句の「みかどの玉で飾つた臺の上に集まり、柱と柱のあいだの玉座のあたりを舞い飛ぶ」ものとは、初句の「胡風」に吹かれた「朔雪」であるに違いない。従つて、

第二句の「千里龍山を度る」ものとは、當然、北から吹く「胡風」であり、それに吹き運ばれる「朔雪」、北方の雪でなければならぬ。『文選』の五臣（呂向）注が「言、

風雪自北來、度於龍山（言ふこころ、風雪北より來たり、龍山を度るとなり）」はそのことを言うのである。

同じく『文選』卷三十の南朝齊の謝朓「觀朝雨」も同様

である。その前半八句を引く。

觀朝雨 謝玄暉

朔風吹飛雨 朔風飛雨を吹き

蕭條江上來 蕭條として江上より來たる

既灑百常觀 既に灑ぐ百常の觀

復集九成臺 復た集る九成の臺

空濛如薄霧 空濛として薄霧の如く

散漫似輕埃 散漫として輕埃に似たり

平明振衣坐 平明衣を振ひて坐せば

重門猶未開 重門猶ほ未だ開かず

「朔風」は北風。第三句の「既に灑ぐ」の主語は明らかに

「飛雨」だから、第二句の「來」の主語も「飛雨」であり、

「飛雨」を吹き運ぶ「朔風」である。つまり初二句は、北

風が散り飛ぶ雨を吹き運んで、寂しい雨音が川を渡ってく

ることを詠うのである。この表現は、李白が「我吟謝朓詩

上語、朔風颯颯吹飛雨」(「酬殷明佐見贈五雲裘歌」と賞贊

した名句であった。

そのような表現の型を蘇頌が理解し、學んでいたことは、

雲を吹く風(大谷)

彼自身の次の五言排律の冒頭四句の表現に明らかであろう。

奉和聖製幸望春宮送方朔大總管張仁亶 蘇頌

北風吹早雁 北風早雁を吹き

日夕渡河飛 日夕河を渡りて飛ぶ

氣冷膠(一作葭)應折 氣冷かにして膠(二に「葭」

に作る)應に折るべし

霜明草正腓 霜明かにして草正に腓む

先に述べたように「渡」は必ずしも「人」だけを主語とす

る動詞ではない(七頁)。これもその一例であり、「北風」

に吹き運ばれる「早雁」が、晝も夕も、河を渡って飛んで

ゆくことを言う。そして、その「北風」の冷氣が膠を折り

(または葭を折り)、霜を吹きつけて草を枯らしてしまうこ

とを詠うのである。

さらにもう一例、初唐・崔融の樂府詩十韻の冒頭四句を

掲げてみよう。

西征軍行遇風 崔融

北風卷塵沙 北風塵沙を巻き

左右不相識 左右相ひ識らず

颯颯吹萬里 颯颯として萬里を吹き

昏昏同一色 昏昏として同一色

「北風」が「塵沙」を「萬里」のかなたから吹き運んできて、行軍の行くてを眞つ暗にしたことを詠う。第四句「昏昏同一色」は、萬里の長風に吹かれて來た砂塵の表現である。

砂塵は次の絶句にも詠われる。『唐詩選』卷七に收められた盛唐・張子容の七言絶句である。

涼州歌第二疊 張子容

朔風吹葉雁門秋 朔風葉を吹く雁門の秋

萬里煙塵昏戍樓 萬里の煙塵戍樓昏し

征馬長思青海上 征馬長く思ふ青海の上

胡笳夜聽隴山頭 胡笳夜聽く隴山の頭

起句は、北風が雁門の木の葉を吹き散らすこと、承句は、「萬里」かなたから煙のような砂塵がその北風に吹き運ばれてきて、物見やぐらのまわりが夜の暗さになったことを言う。そして轉句は、「胡馬北風に依る」(古詩十九首・其一)を典據として、北風が軍馬に故郷を思わせることを詠

う。つまりこれもまた、北風が何かを吹き運んで千里萬里を渡るといふ表現の類型に屬する絶句なのである。

問題の詩を改めて掲げてみよう。

汾上驚秋 蘇頌

北風吹白雲 北風白雲を吹き

萬里渡河汾 萬里河汾を渡る

心緒逢搖落 心緒搖落に逢ひ

秋聲不可聞 秋聲聞く可からず

轉句の「搖落」は木の葉が風に舞い落ちること、結句の「秋聲」は風の音、落葉の音を言う。すなわち四句は一貫して起句の「北風」に關わる表現であり、それは今まで掲げて來た鮑照詩、謝朓詩、蘇頌の排律、そして崔融詩、張子容の絶句における「胡風」「朔風」「北風」の描き方の類型に屬するものと考えられるのである。

鮑照詩をはじめとする表現の類型がこのようにあったにもかかわらず、「萬里渡河汾」の句の「渡」の主語を作者自身として詠うこと、またそう解釋することは難しい。「渡」とは、萬里かなたから吹く北風が白雲を運んで汾水

を渡つてゆくことである。表現の類型を知る唐代の人々にとっては、その意味は自明だったであろう。

## 五

それにもかかわらず、第二節に記したように、江戸時代以来の日本の唐詩注釋書の多くは、「汾上驚秋」の承句「萬里渡汾河」の「渡」の主語を作者蘇頌自身としてきた。『唐詩選』を刊行した服部南郭の講義を伝える『唐詩選國字解』（天明二年「一七八二」刊）も同じである。

夏カト思フタニ、ハヤ秋風ガフキワタル。秋ニナツタ  
ユヘ白雲ナドモトブ。コノモノサビシイジブン、吾レ  
ハ萬里ノ旅ニイテ、汾河ヲワタリ

先にも記した（四頁）ように、同じ徂徠門の入江南溟『唐詩句解』も「已<sup>すて</sup>に郷を去ること萬里にして獨<sup>ひと</sup>り河汾を渡る」としていた。二人の師の徂徠も、おそらくは同様に讀んでいたことであろう。そして、それが今日でも通説の地位を占める解釋であつた。

その解釋を誤りとする前節までの考察に假に大過ないと

雲を吹く風（大谷）

すれば、次の課題は、その「誤讀」の由來を推考するところに求められるであろう。

詩句の意味を誤つて解することは、わずかな不注意、思い違いから生ずることがある。まして「汾上驚秋」の「渡」の主語を何と取るかは、中國の注釋書においても古くから意見の分かれる難問であつた。江戸時代以来の學者の多くが「渡」の主語を作者と考へたことには無理もない。その「誤讀」をあげつらうことには何の意味もない。

しかし、わが國の漢學者による中國詩の「誤讀」の背景には、自他におけるもの感じ方、考へ方の相違が存在することもあるだろう。「誤讀」が、和漢の文學における情緒、思想の相違を知るための手がかりになるかも知れない。「汾上驚秋」の場合は、どうであろうか。

この節では、「汾上驚秋」詩を講釋した服部南郭と、それを聽聞した賀茂真淵との挿話を通して、その問題を考えたい。伴蒿蹊『近世畸人傳』（寛政二年「二七九〇」刊）卷之三、津阪東陽『夜航餘話』（天保七年「二八三六」刊）卷之下にも見られて廣く知られた挿話であるが、ここでは、上

田秋成『膽大小心録』（文化五年「二八〇八」成立）所載の話を引いてみよう。秋成は特にこの挿話を好んだらしく、他の著書、『金砂』（享和四年「二八〇四」成立）、『茶痕醉言』にも同じ内容の話が見られる。

南郭服子の詩を講ずる席に、眞淵も参りて聞（く）。講竟りて後に、席をすゝみて、「先生の詩名、いにしへよりの巨臂（巨擘の誤りか―大谷注）と人申（す）事なり。たゞおしむらくは、唐の風體を弃て、古に泊りたまはぬことを」ときこゆ。服子あざわらひて、「汝は多せ言いふものなり。詩は初唐の氣格高くして得がたし。盛唐より中唐の風に擬すべし。晩唐は又野なり。何心をもてかく云（ふ）ぞ」と。答（ふ）。「今日の講には、汾上驚秋の詩、北風吹白雲、萬里渡河汾、此二句にて意は盡（き）たり。心緒逢搖落、秋聲不可聞とは、上の二句の注解に似たり。四韻六句の肩（けい）に入（り）て、このわづらひ有（り）とぞ思ふ」と。服子打（ち）もたゞで、「三十年おそく生れて、汝と同じく學ばざる事よ」とて、歎息せられ

しとぞ。……

日本古典文學大系『上田秋成』（中村幸彦校注）の本文を示したが、その頭注には「金砂六には、この話を宇萬伎に聞くとある。茶痕醉言」とある。『萬葉集』注釋書の『金砂』卷六には、眞淵の弟子であつた「亡師宇萬伎」（加藤字萬伎）の「かたり言」としてこれを記している。眞淵と南郭とのあいだに、事實、これに類した對話があつたのであろう。

南郭の『唐詩選國字解』を再度引用する。「夏カト思フタニ、ハヤ秋風ガフキワタル。秋ニナツタユヘ白雲ナドモトブ。コノモノサビシイジブン、吾レハ萬里ノ旅ニイテ、汾河ヲワタリ」。そのような講釋を聞いた眞淵は、起承句の「北風吹白雲、萬里渡河汾」に羈旅の意は盡きており、轉結句の「心緒逢搖落、秋聲不可聞」は無用の注解に過ぎないと難じた。「四韻六句の肩」とは、律詩や六句からなる短律の格を言うか。そのような言葉の多い詩體の弊害を免れないと主張したのである。

さらに、『茶痕醉言』（上田秋成全集）卷九）の方の挿話

では、眞淵は、そうした言葉の過剰は、「國風の古雅には是無し」と述べる。和歌では、風が雲を吹き、我は渡河するという含蓄に富んだ古雅な表現がありえた。そこに日本の古歌の唐詩よりすぐれる所以があると論じたのである。

眞淵のその論には、彼なりの確かな根拠があつたことであらう。なるほど、旅の和歌の多くには雲が詠まれる。そして、雲が詠まれて、それだけで旅情が盡くされるのである。

たとえば『萬葉集』卷三の次の歌などが眞淵の念頭にあつたかも知れない。

志賀に幸したまひし時に、石上卿の作りし歌一

首 名闕く

ここにいへして家やもいづち白雲しろくものたなびく山を越えて來にけり

旅路の雲は故郷をふり返る旅人の視線をさえぎるものとして描かれた。「白雲のたなびく山を越えて」に萬感の思いがこめられたのである。

下つて、江戸時代初期、後水尾院歌壇で編纂されたとい

雲を吹く風（大谷）

う『類題和歌集』（元祿十六年「一七〇三」刊）卷二十五には「旅」の題のもとに二百十八首の歌を収めるが、うち三十首に「雲」が詠まれている。その中から、最後の敕撰和歌集『新續古今和歌集』（永享十一年「一四三九」成立）の歌二首を引用してみよう（日下幸男編『類題和歌集』による。表記は一部改める）。

かへりみる雲のいづこかそれならんしらず月日を故郷ふるさとの空（平氏數）

『萬葉集』の石上卿の歌と同じく、雲に隔てられた故郷の方の空をふり返つて、いつの間にか月日を経てきたことを思うのである。

逆に旅の行くての雲が詠われることもある。

行すゑも猶なほかさなれる山の端はの雲のいづくをあすは越まし（圓照法師）

重疊する山の端の雲のどのあたりを、明日は越えて行くのかと詠う。旅路の遠さを重なる雲が暗示するのである。

そのような「白雲」が詠われることは連歌にも珍しくない。たとえば、長享二年（一四八八）、宗長獨吟『伊勢千

句』（京都大學文學部藏）第二の何木「いつそめし」百韻に次の付合がある。

わがいもおもふ旅のかなしき

白雲のたなびく山を越え暮て

都の空よいづちとか見む

「白雲」は、越えてゆく山にかかる雲であり、また都の方を振り返る視線をささぎる雲ともなるのである。

『賀茂翁家集』秋歌にも次の作がある。眞淵の故郷の遠江國、小夜中山さやのなかやまの西方にある粟ヶ岳あわがたけを描いた畫の中の旅人の心になって詠んだ初秋の歌である。

とほつあふみの佐益の中山の西につづきて、今はあはがだけとて高き山あり、延喜の式に安波波神社とあるこれなり、そのかた繪にかきたるにそのふもとに旅人あり、それがこころをよみつ、時は秋のはじめつかたなり

東路は衣手あしもちさむししら雲のあはがたけの秋のはつかぜ

旅人が、白雲のかかる粟ヶ岳を振り仰ぎながら、風の冷た

さに秋の訪れを知ったと詠う。南郭の講釋による「汾上驚秋」の起承句の句意、「ハヤ秋風ガフキワタル：白雲ナドモトブ：コノモノサビシイジブン、吾レハ萬里ノ旅ニイテ」にほぼ重なる情趣の歌となるであろう。

さらに眞淵は、旅立った女弟子のひとりを思い、その旅路の白雲を詠う。

よの子が信濃路をへて紀の國へゆくに、立ちにし後おもひやりてよめる

今日もかも分け行くらしも大木會おほぎそや小木會をぎその山の峰のしら雲

旅路を踏みわける人を思いやつて、木會の山々にかかる白雲を點景する。その人が雲を見て離愁を募らせることを想像したのである。

眞淵は、「汾上驚秋」の「北風吹白雲、萬里渡河汾」を、そのような和歌や連歌の漢詩譯のように讀みとつたのではないか。「此二句にて意は盡きたり」（『瞻大小心錄』）、「客情盡きたり」（『茶寮醉言』）と見たのも、また當然と云うべきであろう。



眞淵の議論に承服した南郭もかつては歌人として柳澤吉保に仕えた人であった。その挿話を三度まで記録した秋成も熱心な歌詠みのひとりであった。彼らが共有した和歌の情趣によって「北風吹白雲、萬里渡河汾」を讀めば、河を渡るのは旅人と、おのずから理解されたに違いないのである。

## 六

「北風吹白雲、萬里渡河汾」の二句を日本人がしばしば讀み誤った原因は一つではないだろう。この節では、その背景に、歌と詩における「風」の表現の相違があったことを考えてみたい。

『古今和歌集』秋上卷の巻頭に次の歌がある。

秋立日、よめる 藤原敏行  
あき來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚か  
れぬる

立秋の日、目には何の變化も見られないが、風の音に秋の訪れを知ったと詠う名歌である。結句の「驚かれぬる」は

雲を吹く風（大谷）

「はっと氣が付く、ふと感知するの意」であり、漢語「驚」の用法に通じることが指摘されている（竹岡正夫『古今和歌集全評釋』）。まさに「汾上驚秋」の「驚秋」の意が詠われているのである。『古今和歌集』の歌には詩の發想、表現の攝取の例が少なくないが、その一つにも考えうる作であろう。

次の詩と並べてみることにしてもそれは確かめうる。

秋風引

劉禹錫

何處秋風至 何れの處よりか秋風至る

蕭蕭送雁群 蕭蕭として雁群を送る

朝來入庭樹 朝來庭樹に入り

孤客最先聞 孤客最も先に聞く

兩者の相似は明らかである。白居易の親友として、劉禹錫の名は平安時代の人々に廣く知られていた。その詩句のいくつかは『千載佳句』『和漢朗詠集』などにも收められて愛誦されていた。「あき來ぬと」の歌がこの詩の刺激によって生まれた可能性さえ考えられてよいであろう。

しかしその問題は措く。今は、この歌と詩のあいだの相

違について考えてみたい。發想と表現の類似にもかかわらず、敏行歌と劉詩のあいだには決定的に異なる點がある。

劉詩の「秋風」は、庭の木の葉を鳴らす前に、「蕭蕭として雁群を送」ってきたと描かれる。秋風はどこから来たかという起句の問いに、承句が雁の群れを送ってきたと言うのは、北方からだという答えである。すでに引用した高適詩の「北風萬里を吹き、南雁數を知らず」（九頁）、また蘇頌詩の「北風早雁を吹き、日夕河を渡りて飛ぶ」（十一頁）の趣向と同じである。そして、そのように遠く北方から雁を吹き運んできた「風」が、今しも庭の木の葉を落とす。孤獨な旅人こそが、その音をまつさきに聞きつけて秋を悲しむのだ……と詠うのである。

それに對して、敏行の歌では、風の音という一現象によつて秋の到來を知ることが詠われるだけである。雁も庭樹もそこにはない。なかでも、風が雁を吹き送ってきた遠い距離が表現されていないことは重要である。もちろん、五七五七七の三十一文字にその餘裕がなかつたことは考えるべきである。しかし、秋風と雁を詠うおびただしい數の和

歌の中にも、風が雁を遠く吹き運ぶという發想はおそらく見つけにくいことであろう。

『古今和歌集』秋上

題しらず

よみ人しらず

わが門かどに稻負鳥いねおせりの鳴くなへにけき吹く風に雁は來にけり

『新古今和歌集』秋下

題しらず

西行法師

横雲の風にわかるるしのにめに山とびこゆる初雁の聲  
例えばこの二首の歌には、朝の風に乗つてやつて來る雁、  
山をとびこえて姿を現した雁が詠われるが、「秋風引」や  
高適や蘇頌の詩のように、北風が雁をはるかに吹き運んだ  
という方向、距離の感覺が表現されることはない。我が門  
田の向こうの空、峰のこちら側の雲間という小さな空間の  
中に飛ぶ雁が描かれるだけである。和歌では、秋風が雁を  
北から南へ、遠く萬里の距離を吹き送つて來るといふ發想  
がそもそも見られないのである。

雁の場合だけではなく、歌と詩のあいだには、風の描き

かたに大きな相違があった。

「雲吹く風」という歌語がある。

『千五百番歌合』（四百二十五番 右） 忠良卿

夏の月雲吹く風をさきだてて山の端すずし夕ぐれ空

『影供歌合 建仁三年六月』

雨後聞蟬 四番勝 俊成卿女

雨はれて雲吹く風に鳴く蟬のこゑに亂るる杜の下露

『新古今和歌集』戀四

和歌所歌合に、深山戀といふことを 家隆朝臣

さても猶とはれぬ秋のゆふは山雲ふく風の嶺に見ゆら

む

いずれも後鳥羽院の催した歌合の作が挙げられる。『千五百番歌合』は建仁元年（二二〇一）ごろに詠進。『影供歌合』は建仁三年（二二〇三）。そして家隆の歌は、『壬二集』の詞書によれば、建永元年（二二〇六）の「仙洞御歌合」の作である。「雲吹く風」は、おそらくはその頃の後鳥羽院歌壇において生まれた歌語であり、「〇風吹雲」のような詩語にも關わる新しい表現と見ることができよう。

雲を吹く風（大谷）

ろう。しかし、今その穿鑿は措く。ここでは、歌語としての「雲吹く風」の意味合だけを確認しておきたい。

まず藤原忠良の歌は、雲を吹きはらう風を先導として夏の月が山の端から現れ出ることを詠い、また俊成女の歌は、雨後の雲を吹く風、家隆の作は、夕方の端山の峰の上で雲を吹く風を詠む。いづれも、眺めやる空に雲を吹きはらう風を捉える。その空は、山の端によって區切られた空間である。山の端のこちら側の空である。「雲吹く風」は、その限られた空間の中に、雲を吹きとばす風として描かれるのである。

それに對して、詩に詠われる風は、これまでに多くの例を挙げてきたように、何かを遠くへ吹き運ぶ風であることが多かった。その何かが「雲」である場合を、さらに掲げてみよう。

魏文帝の「雜詩二首（其二）」（『文選』卷二十九）には、

西北有浮雲 西北に浮雲有り

亭亭如車蓋 亭亭たること車蓋の如し

惜哉時不遇 惜しき哉時に遇はざること

適與飄風會 たまたま生 適飄風と會へり

吹我東南行 我が東南の行を吹く

南行至吳會 南に行きて吳會に至る

吳會非我鄉 吳會我が郷に非ず

安能久留滯 いづく 安んぞ能く久しく留り滯まらん

棄置勿復陳 棄置して復た陳ぶること勿かれ

客子常畏人 客子常に人を畏づ

と詠い、それを典據とするであろう孟浩然の五言律詩「送

謝録事之越」の前半四句にも

清旦江天迴 清旦江天迴かに

涼風西北吹 涼風西北より吹く

白雲向吳會 白雲吳會に向ひ

征帆亦相隨 征帆も亦た相ひ隨ふ

とする。ともに「白雲」は故郷を遠く離れた旅人の譬えで

あるが、「飄風」や「涼風」が「白雲」をはるか東南の吳

國まで吹き運ぶことを言うのである。李白「久別離」にも

「東風兮東風、爲我吹行雲使西來（東風よ東風、我が爲に行

雲を吹いて西に來らしめよ）」とある。その類の表現は少な

くない。いずれも遠方の空まで雲を吹き運ぶ風を描くのである。

時代は下るが、明・張以寧の「閩關水吟」（『石倉歷代詩選』卷二百八十二）に

天風吹雲數千里 天風雲を吹くこと數千里

飄飄直度長江水 飄飄として直ちに渡る長江の水

とある例は、問題の「北風吹白雲、萬里渡河汾」の表現を襲うものでもあろう。

中國の詩人たちは、雲を萬里かなたから風に吹き運ばれて來たものとして、また萬里かなたへ吹かれてゆくものとして描いた。詩の空間は地平線の向こうに續いて、無限の廣さをもつ。風は、その無限の空間を、雲を運んで吹きわたるものと想像されたのである。

他方、敏行の歌の「風のおとにぞ驚かれぬる」にはその感覺がない。風がはるか北方から吹き來たつたものという意識は全くうかがわれない。「雲吹く風」の歌語を生んだ中世の歌人たちにもそのような想像力はなかった。雲は、山の端にかかる雲、峰にただよう雲として詠まれた。山ぎ

わの小さな限られた空間の中に、雲は描かれた。かれら歌人たちの空間意識は、大和盆地、山城盆地のなかで育まれてきたのであった。山の端によって切り取られた空間が、多くの場合、彼らの詠む歌の世界であった。

「汾上驚秋」の「北風吹白雲、萬里渡河汾」は、地平線のかなたから、萬里の距離を北風に吹き運ばれ、今しも汾河を渡る白雲を描くものであった。我が歌人たち、あるいは歌人の末裔たちには、そのような無限の空間を吹きわたる風、風に吹き運ばれる雲を想像することが難しかったのではないか。